

## - 新生相良藩 神城文化の森 -

日本、木の文化の地域づくり

～自然・季節観に抱かれた暮らし方を生かした地域づくり～



神城文化の森

神城文化の森  
**藤田財団**

理事長 藤田 勲



鎌倉時代初頭に地頭に任ぜられたことを起源として、その後、明治維新に至るまで、この球磨・人吉の地を営々と治めた相良藩は、千年の寿命をもつ市房杉と豊かな原生の自然を有し、植林を重視する等、その美風は「木の文化」に彩られます。

このような旧相良藩の歴史や自然と木の文化を受け継ぎ、次の世代、後継者に引き継ぎたい。豊かな森林や木を守りたい。そのための「木の文化の地域づくり」が私の45年の願いであり、昨年9月に設立した「神城文化の森 藤田財団」の使命です。昨年、内閣官房から「地域活性化伝道師」を拝命した私の責務でもありと考えております。



### 1 木の文化による地域づくり

球磨・人吉全体で守る森林を地域の財産としてとらえると、あらためて森林や木が果たす役割、私たちの暮らしを守っている森林の働きが見えて



きます。木は心に安らぎ、安寧感を与えます。私たちが暮らしていくための大事な財産です。森林は将来の世代、後継者に引き継ぐものです。伝えたい木の文化、遺したい美しい山林の森があります。現在、木をふんだんにつかった住まいが大変な人気です。人々は暮らしのなかに自然を求め、木の温もりが求められているのです。その肌ざわり、温かさ、親しみやすさ、木目の美しさ、香りといった木の魅力が私たちの生活に潤いと安らぎ、癒しを与えてくれます。暮らしの多くが木の恩恵に満ちる。これこそがこの国の木の文化です。それを球磨・人吉から、日本全国に、そして世界に発信していきたい。そう思っております。

市房山の市房杉は、樹齢千年とも言われ、その美しく緻密な木目が特徴の貴重な銘木です。このような樹齢をもつには、水が清浄でなければなりません。大自然が生み出す本来の、本当にきれいな

な水を私たちが手に入れることは非常に難しいとされます。沖縄や九州南部で降る雨水、屋久島の源流といった一部でしか、自然本来の純水無垢な水は存在しません。そのような貴重な水質の水が、私の知人である日本有数の“水の専門家”池田比呂志氏【(株)マーフィード社長・横浜市】の手によって、市房山の一部の源水で見つかりました。

空気汚染の無い南洋の海で蒸発した純水無垢の水が、大自然の中で地表に降り注ぎ、汚染の無い清流として流れているのです。



そして日本の四季は木の木目に現れます。市房杉で作ったひな人形、市松人形、工芸品には、人為を越えた至高の美しさがあります。

### （木の文化による地域づくり）

伝えたい木の文化、遺したい美しい山林の森、そして旧相良藩の歴史を、後継者に引き継いでいくには、球磨・人吉地域が受け継ぐ「木に対する眼差し、作法、美意識」を暮らしのなかで研ぎ澄まし、木に包まれ、木とともにある暮らし方というものを築き上げていく必要があります。それは木の文化、旧相良藩の歴史を受け継ぐことでもあります。そして、そういった暮らし方を軸に、手仕事や産業を興し、誇りや郷土愛、地域の信頼や絆を築いていくことです。そうすることで球磨・人吉の豊かな森林も守られる。このような取組みを広げれば、次のこの国の自然や地球環境も守られていきます。これが球磨・人吉の“木の文化に

よる地域づくり”です。

木という命を介して、地域の産業や地場のもの、技などがつながりあい、新たな価値を創出する商品やサービスも、どんどん生みだされていく。そして地域が生き長らえるとともに、市房山の千年杉も二千年杉と呼ばれるくらいに生きつづけてもらいたい。

豊かな球磨・人吉の資源や特性、文化に目を向けると、地域の奥行き深い潜在可能性が見えてきます。森林セラピー、木でつくられた施設や住まいの建築、家具や調度品・小物、歴史的な建造物の復元、木をふんだんに使った地産地消の路づくり、木の文化の体験、ラフティングを始めとする地域ならではの自然体験などが、その主題として浮かび上がります。当然、このほかにも考えられるでしょう。地域が想いをひとつに、“木の文化による地域づくり構想”という夢を描き、そのための第一弾としての取組みをプロジェクトとしてつくり込んでいく。そしてその実現が地域の願いとなっていく。そのような取組みがどんどん広がっていく。そうなることを願っております。



その実現のため、藤田財団では、球磨・人吉10市町村をひとつと考え、東西南北と中央の5つの地域（相良文化の“五色の龍神”にならひ）と考え、その地域の民間からなる18名で、『日本、木の文化と地域づくり委員会』を平成23年2月19日に立ち上げました。地域や住民の方、地元企業の方と手を携え、主に民間の立場から、地域活性

化の計画を検討していくこととしています。こうした取組みが、行政の取組みと一体となって、国の支援等も受け、新たな地方の時代を築く、先導的なモデルとなるよう、精力的に取り組んでいくつもりです。

## 2 木から緑・花・水への広がり

古来より、日本人は人間を中心に自然を見るなどということはしませんでした。自然を、怖いものだが同時に人々をやさしく包んでくれる、生きる恵みを与えるものとして感謝、敬愛し自然に徙いながら生きてきました。そうして自然に対する美意識を鋭敏にしてきました。木は自然の一部として、私たちの命とつながっており、私たちの心に何ごとかを語りかける。それに癒され、懐かしさと温もりを感じるということであろう。しかし、それは木だけではない。緑や花、そして水の恩は、人間が一生返すことのできない尊い恩でありますので、このような水のきれいな所に、大きな命の息吹が宿ります。市房山源流水



内閣官房の「地域活性化伝道師」の活動を縁に、木、緑、花そして水に対する美意識や作法、文化を、次の世代につなげようとされている方々との面識を得ました。意気投合し、今年の2月19日に、当方の「神城文化の森」に一堂に会し、それぞれの溢れる想いを交わしました。まずは、自然を再生する庭づくりを信条とする作庭家中野和文さん（熊本市）。中野さんがつくる庭は、それこそ中

野流であり、雑誌などでも特集として紹介されています。次に環境演出家®の木村三重子さん（福岡市）。花に対するやさしい眼差しを暮らしのなかに溶かし込むことで、心豊かな暮らしづくり・街づくりを進められております。

作庭家中野和文さんは、“自然を敬う心が未来を照らす”と、心に光を当てます。「私たちの先祖は、半世紀前まで、身のまわりの生きる糧となる、自然の全ての諸々の物に、山の神、水の神といった神の称号をつける。みずから作った物でも、大地からの恵に感謝し、五穀豊穰を祝い感謝し、自然の中で生かされているという教えを、日々の暮らしのなかで、先人から受け継ぎ引き継いできました。地球環境の再生は、人間と自然とのかかわりを理解する心の再生とあわせ、地域に育つ子ども達に自然を敬う心を育み、世代を超えて、地域のつながりを再生していくことが大事」と口を極めます。そのような想いが、中野さんのつくる庭には溢れます。

木村さんは、そのような自然を敬う気持ちを、暮らし方や暮らしの文化、生活の作法として、形にしていくことが大事とやさしく語ります。「花や緑に触れてみる。人は、ただそれだけでやさしい気持ちになったり、元気になったりします。花や緑には不思議な力があります。私たちは花や緑の不思議な力を借りて、吾住む町の歴史や環境、自然に生かされている命に感謝する暮らしを大切にしています。“まちの営み”を皆で関わる緑花活動で取り戻す。まちを美しく元気にして安全安心で持続可能なまちづくり。“お陰さまで、およばずながら”の掛け声で笑顔を分け合いながら校区発、市民発の花や緑での日常づくりをしています」と語られます。そこには、その想いを子どもたちに引き継ぎたいと願う熱い想いが覗きます。

そして、私とお三人には切り離せないものがあ

ります。木、緑、花に必要な不可欠な“水”です。



(左から中野氏、木村氏、藤田と池田氏)

私は、人類がどんなに進化しようとも、どんなに科学が進歩しようとも、生きるものすべての根源である“水”がとても大切で感謝しなければならない事を伝える取り組みも考えています。

自然の水が、健康な暮らしには不可欠です。

球磨水上村の奥深い山の市房山は、国指定天然記念物の「ゴイシツバメシジミチョウ」が、日本で初めて発見された所です。この蝶は、今から200万年以上前、日本がまだ大陸の一部だった頃の残存種で、大変な珍種と知られています。そんな太古からの命が残る【市房山の水】を知って頂き、水の大切さを再認識してもらいたいです。

### 3 今後の新たな展開

私とお三人の考えを重ね合わせ、その共鳴点を描きだすなら次のようになります。

“木にふれ木の文化を楽しむ暮らし方”“ありのままの自然の緑を身近に置き楽しむ暮らし方（五感で季節や自然を感じる、ありのままの自然にふれ合う）”“花を愛で花を楽しむ暮らし方”“水に感謝しふれあいのある健康な暮らし方”。例えばこのような「木、緑、花、水のある暮らし」、それこそが、先人たちの心を受け継ぎ、地域における伝統的な暮らし方を見つめ直し、地域の誇りとなる暮

らし方をつくり出す。そこにある「心地よさ」「心の豊かさ」から「一人ひとりの生活の豊かさ」を築いていく。それは、花と緑、木と人の命が響きあい、そのなかから生み出される暮らしであり、日本独自の美意識や文化を体現する暮らしでもあります。日本独自の自然観、美意識を研ぎ澄ます暮らし、季節感、粋、風流な暮らしなど、本来日本が諸外国に対し、高々とした思いをもって誇りとすべきものです。このような暮らし方の実現こそが、諸外国に対し、日本という国を真に理解してもらおううえでも重要な気がしてなりません。

さらに、このような地域づくりに迫る際の要所も浮き彫りになりました。第一に、自然に活かされ自然に教わりながら、研ぎ澄まされてきた美意識や作法、生活様式、さらには精神というものを、見つめ直し、受け継ぎ、そして次の世代にしっかりと引き継いでいかなければ、地域社会は成り立っていかないということです。第二は、それを土地の文化にまで高め、地域の手仕事や雇用、信頼と絆、愛着と誇りなどに連鎖的につなげ、地域づくりに結び付けていくことです。第三には、そのような取り組みは、帰属意識を共有するコミュニティや、生活圏域を舞台に展開していくこと。そして本物の価値は、必ず地域を越え全国さらには世界にも通じるということです。

今後、私を含め、それぞれが、自然に抱かれた文化を活かした地域づくりに取り組み、そのなかで助け助けられて、その想いを九州から、全国にそして世界に広めてまいりたい。その共感の輪も広げていきたい。その先導役を藤田財団として担っていく。そして、この美しい日本を次の世代、後継者にしっかりと引き継いでいきたい。そう考えております。

(HP) <http://www.fujita-zaidan.org/>  
(Eメール) [info@fujita-zaidan.org](mailto:info@fujita-zaidan.org)